『三四郎』乞食と迷子

Junko Higasa

漱石の心理をよく解した弟子の芥川龍之介が『二人小町』に描く。女の小細工に翻弄された黄泉の使いが、小町たちに「そんなに憎ければ、思い切って憎みなさい」と云われて『（憂鬱に）ところが憎み切れないのです。もし憎み切れるとすれば、もっと仕合せになっているでしょう』と云ったあと、急に元気を取り戻して「しかしもう大丈夫。あなた方は昔と違い、今は女乞食だから、惑わされない」という。

漱石は『虞美人草』で「藤尾のような女は許せぬ」と作中で殺す計画を立てながらも、同情が起ってなかなか殺せなかった。『三四郎』の美禰子を「心(しん)が乱暴な女」として描きながらも、『私そんなに生意気に見えますか』と彼女の苦悩も鑑みた。これは先の黄泉の使いが「女を憎めなかった」通りである。「許せない」と思いつつも、憎み切れないのだ。それゆえ美禰子の言い分を「乞食」と「迷子」になぞらえて表現した。

皆で菊人形を観に行く途上、大観音の前に乞食が居る。野々宮さんが『君あの乞食に銭を遣りましたか』と問う。『いいえ』と答える三四郎。『遣る気にならないわね』というよし子。その発言を冷静に受け止める野々宮さん。『ああ始終焦(せ)っ着いていちゃ、焦つ着き栄えがしないから駄目ですよ』と評する美禰子。『いえ場所が悪いからだ』と評する広田先生。「もし山の上で出会ったなら遣るかもしれない。けれど山では人通りがないかもしれない」三四郎は彼らの意見を都会人種的であると悟った。

田舎の人情は健在だ。けれど都会では情に棹させば流される。三四郎はまだ山の上の人であり、都会の女の小細工に翻弄される人である。そして都会に馴染んだ野々宮さんは、男より付属物の地位をねだる女の小細工に動じず、女の責任を負う前に自分の人生の基盤を考える人である。女の小細工を充分に活用して男を惑わす知的な美禰子は、女乞食のように露骨にねだることは自分の理想を遠ざけることを知っている。広田先生は、もし東京でなかったら女の人生選択は違ってくるだろうと評する。

そしてしばらくすると、今度は迷子に出逢った。子供は「凡ての人の注意と同情を惹きつつ」頻りに泣き叫ぶ。往来の人は心を動かしつつも、誰も手を付けない。『私の傍まで来れば交番まで送ってやるわ』けれど「追掛けてまで連れて行くのは厭。何故って、こんなに大勢の人がいるから私に限ったことではない」というよし子。『やっぱり責任を逃れるんだ』という広田先生。それが文明的社会である都会の特徴である。

そのあと気分が悪くなった美禰子を追って外に出る三四郎に、美禰子は文化的女の立場をそれとなく語る。二人が座る小さな河のほとりの草むらにまで、菊人形の「売り込み」の声が響く。乞食の願いも同様である。最新文明に群がる人は、一本の細い蜘蛛の糸にすがって、届かぬ天を仰ぐ人のようである。文化的女の苦悩もそこにあるかもしれない。美禰子は自らを「御貰いをしない乞食」という。さらに「大きな迷子」だともいう。教養を身に付けて、自分の預金通帳を持つ美禰子は、生活のために自分を安売りすることはできない。けれど自分をそれ以上に発展させようにも、女性の地位が低い世の中では結婚以外に生活する道はない。もし田舎の女のような生活に満足することが出来たなら仕合せだろう。けれど中途半端な教養がそれを邪魔する。漱石は「時代と自我の中で泣きながら保護者を探し求める女」を憎み切れない。(2014.5.25)